

はじめに

言語研究という面から見れば、レキシコンという分野は、多くの研究分野の1つにすぎない。にもかかわらず、レキシコンの研究にはさまざまな可能性が存在する。レキシコンを扱える理論にもいくつかの枠組みが存在する。また、レキシコンと他分野をまたぐ研究にも、さまざまなものがある。同じような課題でもアプローチの仕方によって、取り組み方が異なってくる。レキシコンの分野に限っても、すべての研究の流れをつかむことは、それほど簡単なことではない。

すべての言語研究において（さらに言えば、すべての学問分野に共通であるが）、なにかしらの研究課題を追究することになると、オリジナルな研究をする前の前提条件として、これまでどのような研究が行われ、どのようなことがどこまでわかっており、現在どのような取り組みが行われているかなどの研究の流れを知っておく必要がある。長年の研究の積み上げがある課題を自分で調べていこうとすると、その全体像をつかむにはかなりの時間がかかる。

特定の分野でホットな課題を追究しようとする、最新の論文を読むことが重要になってくる。最新の論文は、先行研究の最も最近に至るまでの簡略な概観が含まれているため、研究の流れがつかみやすいという利点がある。ただし、最新の論文で導かれている結論は、必ずしも正しいものではないかもしれない。そのため、当該の課題に関するさらなる検証が必要になってくる。また、論文で書かれていることにはかなりの妥当性があるとしても、すべてが解決されているわけではなく、残された課題があるため、さらに追究を進めていく必要がある。このように、厳密に研究を進めるには、いくつかのステップを踏んでいくことが重要になる。

本論集に取められている論文はすべて、いわばレキシコン研究に関するホットな研究課題、最新の研究成果を著したものである。論文を読んでいただければわかるように、それぞれの論文にはバックグラウンド、つまり、先行研究が存在する。そして、これまでの研究を一步進めて、新たな知見をもたらしている。

どのような成果がもたらされることになるにせよ、研究は、それによって

完結するわけではない。残された課題を知ることにより、新たな研究テーマが生まれ、さらに研究を進める動機づけが生まれることになる。そのため、今回の企画として、寄稿者には、論文の最後に当該のテーマの将来の展望について述べてもらい、そのテーマをどのように追究すべきかの示唆が得られるようにしていただいた。このような将来の展望は、学術論文では何も書かれないことも多いが、このことを明示的に示すことで、当該テーマに興味を持つ読者がそのテーマで研究を始め、さらに研究が発展していく一助になるのではないかと期待している。

本論集は、もう少し早く世に出す予定であった。しかし、2020年の始めあたりから日本を襲っている新型コロナウイルスで執筆者および編者の仕事大きな影響を受け、刊行までに予想外の時間がかかってしまった。遅れに関しては不可抗力の部分大きいことも事実であるが、お詫びを申し上げたい。

2021年1月18日

岸本秀樹

目次

はじめに iii

第1章	分散形態論と日本語の他動性交替.....	大関洋平	1
第2章	コト節をとる難易述語とコントロールについて	王丹丹・竹沢幸一	25
第3章	「ない」イディオムと語彙化： 現象優先主義の試み.....	西山國雄	51
第4章	フレーム意味論と force dynamics： wipe に基づく結果構文の場合.....	岩田彩志	81
第5章	サイズ修飾の形態特性.....	渡辺明	107
第6章	補助動詞構文における V2 の文法化： 脱範疇化と融合.....	岸本秀樹	135
第7章	上甕島瀬上方言における歯茎濁音系と歯茎鼻音系との対立： 娘言語の心的辞書に残る祖語の音素対立.....	黒木邦彦	161
第8章	名古屋方言疑問文の音調とピッチ変更.....	田中真一	185
第9章	分散形態論による日本語オノマトペの分析.....	漆原朗子	205

第1章

分散形態論と日本語の他動性交替

大関洋平

要旨

本稿は、分散形態論 (Distributed Morphology; Halle and Marantz 1993)、特に項構造に対する構文主義アプローチ (Hale and Keyser 1993) に基づき、日本語の他動性交替を説明することを目的とする。まず、Jacobsen (1992) による「二重」他動性交替のパラダイムを概観し、語根と他動性接辞の役割を分離できないという問題を指摘した後で、これまで理論的に未開拓であった「三重」他動性交替を詳細に観察し、新しい記述的一般化を提示する。そして、日本語の他動性接辞は機能範疇 Voice の形態的具現であると提案し、little *v* に関する経験的予測が形容詞・名詞派生動詞によって支持されることを示す。最後に、理論的帰結として、語根はいかなる項構造も持たないと主張し (Marantz 2013a)、項構造研究に関して将来の展望を述べる。

キーワード： 他動性交替, 項構造, 語根, Voice, little *v*, 分散形態論, 構文主義, 日本語

1. はじめに

自然言語における「語」という言語単位は、意味・音韻解釈で散見される語彙性と統辞計算で観察される規則性を併せ持ち、言語理論において体系的

第2章

コト節をとる難易述語と コントロールについて

王丹丹・竹沢幸一

要旨

本研究は、日本語におけるニトッテ経験者句とコト節をとる難易述語を考察対象とする。「簡単だ」「難しい」といった難易述語の項構造を明らかにした上で、難易文における主節の経験者ニトッテ句とコト節の主語の現れ方に関して4つの可能性があることを指摘し、この4つの配列に対してそれぞれコントロールの観点から分析を与える。さらに、本研究の考察は「任意の解釈」を持つ空主語の認定もコントロールによるという Epstein (1984) などの議論と合致することを論じる。

キーワード： 難易述語, ニトッテ経験者, コントロール, ゼロ要素, pro

1. はじめに

日本語における難易述語は、「-にくい」「-やすい」「-づらい」「-がたい」「難しい」「易しい」「困難だ」「簡単だ」などが挙げられる。このうち、(1) (2) に示すように、「-にくい」「-やすい」などは動詞連用形に後続し、複合述語の形式で使われるが、「難しい」「簡単だ」などは、「こと」節や「の」節（以下、コト節と呼ぶ¹⁾）をとり、単独で述語として使われる。

1 本研究では、「の」と「こと」の使い分けについては論じない。

第3章

「ない」イディオムと語彙化

現象優先主義の試み

西山國雄

要旨

本稿は現象の特徴づけを優先して、理論の使用は最小限に抑えるという、現象優先主義を実践する。その一例として、「ない」を含むイディオムを分析する。このイディオムには、「ない」が動詞につくイディオムと、「ない」が独立しているイディオムの2種類があり、それぞれ緊密性の違いにより、いくつかのタイプに分類される (Kishimoto 2018, Kishimoto and Booij 2014)。本稿ではこの2種類のイディオムを基本的に語彙化という通時的プロセスにより分析する。ただし「ない」が動詞につくイディオムの一部では文法化が起こり、「ない」が独立しているイディオムの一部では語彙化が共時文法で起こっている。語彙化と文法化は、その出力が語彙項目か機能範疇かで区別される (Brinton and Traugott 2005)。

キーワード： ない, イディオム, 語彙化, 文法化, 否定, 動詞, 形容詞, 機能範疇

1. はじめに：形態論研究の現状と現象優先主義

現在の形態論研究の現状を概観すると、実に多くの理論やアプローチが存在する。複数の理論の並存はどの言語部門にも見られるが、形態論の多様性は統語論や音韻論の比ではない。これにはいくつかの理由が考えられるが、1つには形態論は統語論と音韻論と密接に関わる部分があり、統語論や音韻論

第 4 章

フレーム意味論と force dynamics

wipe に基づく結果構文の場合

岩田彩志

要旨

レキシコンの研究に語用論的情報を取り込む必要性が唱えられてから久しい。特に構文理論においては、構文とフレーム意味論を組み合わせることが当然とされている。他方で、項構造研究に force dynamics (Talmy 2000, Croft 2012) が重要であることを主張する流れもある。本章では、wipe に基づく結果構文の事例研究を通して、フレーム意味論と force dynamics を組み合わせた理論が非常に有望であることを示す。

キーワード： 結果構文, 使役連鎖, force-recipient, フレーム意味論, 下位範疇化されない目的語, 選択制限

1. はじめに

これまで英語の結果構文に関して、様々な理論的枠組みで様々な分析がなされてきた。しかし、未だに解決されていない根本的な問題が幾つもある。本章では、(1)に見られるような wipe に基づく結果構文の事例研究を通じて、項の表出の問題と選択制限の問題に答えを出すにはどのようなアプローチが有効であるかを示す。

- (1) a. He wiped the table clean.
- b. She wiped the dishes dry.

第 5 章

サイズ修飾の形態特性

渡辺明

要旨

日本語においては、サイズ修飾語が名詞に内在する程度を修飾する場合、形容詞ではない形態をとる。この事実は、物理的な大きさと程度との間に普遍文法が区別を設けていることを示す。また、「おおきい」と「おおい」の形態上の対応関係から、数量に関する表現にもサイズ修飾語が関与していることが明らかであり、非量的程度と比較対照されるべき領域として認識する必要がある。

キーワード： サイズ修飾，最上級，補充法，ゼロ形態，数量，比例量量子

1. はじめに

本稿は日本語におけるサイズ修飾表現の形態的多様性についてあらたな視点を提供することを目的とする。大小を明示するサイズ修飾は、単に物理的な大きさをあらわすだけでなく、様々な種類の程度に関わる形で名詞を修飾する機能も持ち合わせており、その中にはほぼ純粋に文法的な働きをしているとさえ見なしてよいものまで含まれている。その背後にあるのは、普遍文法に由来すると考えられる日本語だけに限定されないサイズ修飾の役割であり、これまで日本語以外の研究では別々のトピックとして扱われていた現象を統一的に捉えた上で日本語にアプローチすることを本章では試みることになる。そこから浮かび上がってくる日本語の特徴は、程度に関わる形でサイ

第 6 章

補助動詞構文における V2 の文法化

脱範疇化と融合

岸本秀樹

要旨

補助動詞構文の V2 として現れる補助動詞は、文法化が起りやすい環境を提供する。本論では、補助動詞構文の補助動詞 V2 に対して、脱範疇化と融合という 2 種類の文法化が起こっている例があることを見る。脱範疇化については、補助動詞の「いる」と「くる」に観察されるが、それ以外の補助動詞には観察されない。融合に関しては、「いる」「しまう」「あげる」などのいくつかの補助動詞で観察される。2 種類の文法化が同じ動詞に対して重複して起こることもあるが、完全に重複しているわけではない。このことは、脱範疇化と融合がそれぞれ独立に起こる文法化現象であることを示している。

キーワード： 補助動詞, 動詞, 文法化, 脱範疇化, 融合, 縮約

1. はじめに

補助動詞構文では、いわゆるテ形動詞（本動詞, V1）に補助動詞（V2）が後続する。補助動詞構文のテ形動詞（本動詞）には、補助動詞（V2）に課される意味的な制約が満たされる限りにおいて、さまざまな動詞がかなり自由に現れる。これに対して、補助動詞として使用できる動詞の数は極めて限られている（Nakatani 2016）。しばしば議論されるように、補助動詞構文の V2 は（実質的な意味を表す内容語が文法要素（grammatical formative）に変化する

第7章

上甌島瀬上方言における歯茎濁音系と 歯茎鼻音系との対立

娘言語の心的辞書に残る祖語の音素対立

黒木邦彦

要旨

歯茎濁音系 d, z と歯茎鼻音系 n とは、上甌島瀬上方言の語中においては合流している。具体的には、(A1) 非高舌系 e, o, a のいずれかに先行する d, n が $/d/ [d \sim n]$ に、(A2) z と、高舌系 i ないし u に先行する d, n とが $/z/ [d\bar{z}^{\text{h}} \sim n]$ に合流しているのである。しかし、 d, z, n が心的辞書（或いは基底）においても合流しているかを (A) のみから判断すべきではない。なぜなら、(A) は表層に生じた現象の観察に過ぎないからである。語中の d, z, n が心的辞書においても合流しているかは、依然として定かではない。この形態音韻論的疑問に関しては、(B1) その対象に濁音系 d, z が含まれていることと、(B2) 「濁音系を持つ固有形態素は連濁しない」というライマンの法則とが注目される。(B) を踏まえて、濁音系 $/d/$ ないし $/z/$ を持つ瀬上方言の固有形態素が連濁するかを精査すると、 n に対応する $/d/$ ないし $/z/$ を持つ固有形態素のみがライマンの法則に反して連濁することに気付く。 $/d/$ ないし $/z/$ を持ちながら連濁する固有形態素には、語中における $d-z-n$ 対立の残滓が見える。このことを踏まえるに、或る言語の祖語に見られた音素対立は、娘言語の表層において失われていても、その娘言語の心的辞書には残存している可能性が有る。

キーワード： 形態音韻論，複合語，連濁，ライマンの法則，生産性

第 8 章

名古屋方言疑問文の音調とピッチ変更

田中真一

要旨

本稿は、レキシコンの情報が文の中においてどのような条件で保持され、また、変更されるかを、とくにピッチという音声要素に着目して論じる。名古屋方言の疑問詞疑問文をおもな対象とし、これまであまり指摘されてこなかったいくつかの現象を新たに報告するとともに、それらの生じるメカニズムについて、音韻・形態・統語・語用論の観点から説明する。

まず、名古屋方言の疑問詞疑問文において、疑問詞が文の中で、他とは異なるピッチ変更を見せることを示す。また、疑問詞疑問文において、フォーカスと音調とが特徴的な対応を見せることを確認し、それが、疑問詞単独の音韻・形態的要因（アクセントと長さ）と同時に、疑問詞としてマークされた結果生じたものであることを指摘する。さらに、疑問詞を含む埋め込み文の音調が、それと同じ分節音配列を持つ疑問詞疑問文とは異なる音調で実現すること、関連して、この方言では、東京方言とは異なり埋め込み標識の「と」、さらにはコピュラ標識の「だ」の省略が可能であることを新たに示す。また、句頭の音節構造に依存するピッチ付与方策が、語用論的情報によって変更される事例を報告し、そのメカニズムについて論じる。最後に、本章のまとめと、今後のレキシコン研究の課題について述べる。

キーワード： 名古屋方言，疑問詞疑問文，音節構造，アクセント，イントネーション，フォーカス，埋め込み文

第9章

分散形態論による 日本語オノマトペの分析

漆原朗子

要旨

日本語のオノマトペには音韻的・形態的規則性が観察されるが、先行研究は音象徴、語彙意味論、構文論的分析などによる音と意味の対応や分布に関する静的な記述分類研究が中心である。本論文では、日本語オノマトペの意味の理解、および新しいオノマトペの生成の背後にあるメカニズムを、分散形態論の枠組みで解明する。特に、自立韻律素や鋳型も様々な意味素性に対応する語彙項目と考えることにより、オノマトペが動的に派生される過程を解明する。

キーワード： 分散形態論, オノマトペ, 自立韻律素, 鋳型(テンプレート)

1. はじめに

いうまでもなく日本語はオノマトペが非常に豊富な言語であり、既存のものに加え、新たなものも生成される。そして、日本語第一言語話者であれば、個々のオノマトペの指示概念を直観的に理解することができる。そこには音韻的・形態的な規則性があり、また、文中でどの範疇として機能し、どのような統語的環境に現れるかについても興味深い一般化が観察される。

そのような背景のもと、オノマトペに関する先行研究も膨大である。秋田(2013)によれば、それらは大別して(1)のように分類される。